

焚書「大衆明治史」菊池寛著 復刻に思う

理事 袴田 忠夫

1 はじめに

筆者は、近年、戦後GHQによって焚書にされた著書が、次々に復刻されていることに鑑み、これまで会誌『郷友』でこれらの復刻書をたびたび紹介してきた。なぜ、戦後GHQによって焚書にされた著書に価値があるのか？ それは戦勝国が戦後日本を弱体化するため、日本の真実の歴史を葬り去ろうとしたからに他ならないのであり、焚書の中にこそ日本の真実の歴史が描かれていると考えるからである。おりしも、来年は日露戦争開戦120周年の年でもあり、このようなタイミングで2022年の1月と8月に、焚書「大衆明治史」菊池寛著の上下巻が復刻された。本書は、「大衆明治史 国民版」菊池寛著（昭和十八年八月三十日五版 汎洋社刊）を底本としている。特に、下巻は、「日本大陸に進む-GHQが消した日露戦争の真実」というタイトルである。

日露戦争は今から約120年前の出来事であるが、私にとっては、比較的身近な存在で、私の母方の祖父が日露戦争に参加しており、開戦時、祖父は、東北弘前市の第八師団（青森、秋田、岩手、山形の出身者で構成された）に所属していた。当時の日本陸軍は、日本防衛の最後の砦として、東北弘前市の第八師団と北海道旭川市の第七師団を内地にひかえさせていたが、初戦における兵力の損耗が激しく、満州と旅順における兵力補充のため、急遽、第八師団を派遣されることが決まった。師団が大阪に集結したのは、1904（明治37）年9月のはじめであったが、行き先が満州か旅順かで、大本営としても決めかねていたため、ついには明治天皇の決断を仰ぐことになり、「北進させよ」の一言で、第八師団を満州でつかうということに決まったという。したがって、祖父は、日露戦争における本格的な戦闘では、明治37年10月17日、ロシア軍に勝った南満州での遼陽会戦後のロシア軍の巻き返しとも言える沙河（しゃか）会戦から参加している。日本軍は、この沙河会戦にも勝利、この会戦の勝利の要因に第八師団の参加があったことから、児玉満州軍総参謀長は大本営に対して、「聖断の明に感激する所なり」と異例の電報を打ったという。

祖父は、その後、203高地攻撃や明治38年3月10日に勝利を収めた奉天会戦等にも参加しており、私が中学生の時に亡くなったが、それまで戦争の話を良くしてくれた。日露戦争については、日本郷友連盟が平成26年に編集した「国民の物語としての日本の歴史」（日本郷友連盟ホームページに掲載）の中でも詳細に述べており、また、筆者は以前、司馬遼太郎氏が書いた「坂の上の雲」を引用し、祖父がかかわった日露戦争の諸作戦について、会誌『郷友』にも寄稿した。以下、「国民の物語としての日本の歴史」および筆者が引用した「坂の上の雲」の日露戦争に係わる個所を再度記述しつつ、焚書「大衆明治史」菊池寛著 日露戦争の真実の要点（常用漢字にないものは一部削除）を紹介して、日露戦争の歴史的意義等について考察することとしたい。

日露戦争に至った歴史的経緯

日露戦争に至った歴史的経緯について、「国民の物語としての日本の歴史」においては、次のように述べている。日露戦争の10年前、1894（明治27）年に日清戦争が起きたわけですが、この戦争において、大国の清が世界の予想に反し、小国の日本に敗れると、欧州列強はこれまで以上に清国に対し利権を求め、中国大陸の分捕りに走ります。そして、満州はロシア、山東州はドイツ、揚子江沿岸一帯はイギリス、広東、広西、雲南省はフランスと、中国大陸はほぼ半植民地状態になります。また、遼東半島返還という三国干渉の中心的国家であったロシアは、返還の2年後には自らが、旅順、大連を租借し、遼東半島を事実上、ロシア軍の要塞と化してしまふのであります。

このような列強による中国の割譲が次々と行われ、清朝の支配が揺らいでいく中、1900（明治33）年5月、中国の宗教結社・義和団が、「扶清滅洋」を旗印に排外運動を起こします。義和団は、キリスト教徒をはじめとする外国人を虐殺し、破壊活動を行い、北京と天津の間の連絡を遮断し、北京の各国領事館地区を包囲します。各国は清国に義和団の鎮圧を要請しますが、逆に、西太后を中心とする清国政府は、義和団を利用して外国勢力を一掃しようと、列国に対して宣戦布告します。こうして、明治33年6月21日、北清事変が始まります。義和団と清国軍に包囲された在外公館員と居留民（約4000人）は北京での籠城に追い込まれます。ここに至って、日、米、英、露、独、仏、墺、伊の八カ国は、連合軍約2万人（約半数は日本軍）を派出させ、7月14日に天津を占領、8月14日には北京を総攻撃して籠城を解きます。援軍が到着するまでの北京籠城戦において、日本軍の指揮官・柴五郎陸軍中佐と彼の指揮する守備隊は、刮目の働きで、暴徒集団の暴虐から公館員等を守りぬき、現場にいた各国の人々の賞賛の的になります。その後、各国軍隊の軍政区域が定められましたが、今度は逆に、中国人への迫害と略奪が発生しました。

ただひとつの例外は、柴五郎中佐の指揮下にあった日本軍政区のみであり、軍紀厳正で略奪も行われず、中国人民も厚く保護されたため、他の区域からも日本の区域に多くの人々が移住してきました。特に、ロシア兵の残虐行為はひどく、北京市長は英国のマクドナルド公使に苦情を訴え、「男は殺され、女は暴行されている。強姦の屈辱を免れるために、婦女子の自殺する家庭が続出している。この地区を日本に受け持ってもらえるよう、是非取り計らってほしい」と哀願したことが記録されています。現在、北京の故宮に展示されている紫禁城の宝物の多くは、このとき、列国による略奪から日本軍が守ったものです。

なお、北清事変の前年、義和団事件が生じた際、この事件を口実にして、ロシアは東清鉄道保護のため、ロシア軍17万7千を満州に侵攻させ、1900年末までに、満州全土を占領します。これが、日露戦争に至る日本とロシアの争いへと繋がっていきます。1902（明治35）年1月30日、日英ともに、ロシアの動きに対応するため、日英同盟が成立します。北清事変における北京での日本軍の行動が、高く評価されたのも日英同盟成立の一因であるといわれています。そして、ロシアはさらに領土拡張策をとり続け、日清戦争のトリガーとなった朝鮮（大韓帝国）へも進出する兆候が顕著となります。1903（明治36）年8月から明治37年1月にかけて、日口間で満州・朝鮮の支配権をめぐる交渉しますが同意に至らず、ロシアはさらに満州南部に兵力を増強します。そうし

た中、明治37年2月に、ソウルで第一次日韓議定書が調印されます。その内容は、①韓国政府は日本政府の施設改善の忠告を受け入れる。②日本は韓国皇室の安全を保障する。などでありました。

この議定書によって、日本は韓国の国内に軍を進めることができたのです。当時、朝鮮半島を祖国防衛の生命線と認識していた日本は、明治37年2月4日の御前会議において「帝国政府はこの談判（何度も行った外交交渉）を継続するも（露国は）妥協に至るの望みなきをもって、これを断絶し、自衛のため、並びに帝国政府の権利及び正当利益を擁護するため必要と認める独立の行動をとるべきことを露国政府に通報、併せて軍事行動をとる」として日露間において大きな国力差、兵力差があるにもかかわらず、また、明治天皇の平和を願う御製「四方（よも）の海 みな同胞（はらから）と 思う世に など波風の たちさわぎらむ」も空しく、日露戦争に突入していくことになるのです。

遼東半島返還という三国干渉受諾の経緯

焚書「大衆明治史」上巻において次のように述べている。明治28年4月28日、この日は下関条約が締結され、日清間に平和が成立して3日目、国民は戦勝に酔いしれている最中であった。一台の黒塗りの馬車がかつかつと、砂利道を急いで、正面玄関にぴたりと横付けになった。不時の来訪に、あわてて守衛たちが駆けつけると、馬車の中からひらりと長身の外人が玄関口に降り立った。「ムッシュー・ハヤシにお目にかかりたい」と言い捨てたまま、勝手知った省内の次官室へ入って行った。東京駐在の露国公使ヒトロヴォーであった。林薫外務次官が何事かと、急いで自室に戻ってくると、ヒトロヴォーは一種興奮の色を面に現して、一面の公文書を取り出した。「本国政府の訓令です。どうぞ御覧下さい」と、林にその封印ものものしい文書を手渡すと、どっかと椅子に腰を埋め、じっと林の表情を読み取ろうとしている。（いよいよお出でなすったな）と、そう直観的に頭にひらめくものがあったが、林はさりげなく、「拝見いたしましょう」と言って、深く息を呑んだ。露国政府の日清下関条約への干渉！ 林の頭の中には、反射的に、舞子で病を養っている外相陸奥宗光の沈痛な顔、伊藤博文首相の愕然たる表情が浮かんだ。林が読み終わるのを待って、ヒトロヴォーは自分で再びこれを口頭で読み上げ、最後の「茲に日本国政府に勧告するに、遼東半島を確然領することを放棄すべきことを以ってす」の個所は、特に力を込めて読んで、林の顔を見つめながら、（今回の覚書は、日清開戦以来、露国政府がやってきた日本政府に対する抗議や覚書とは、全く意味の重大さに於いて違っているのだ）といった意味を、言外に示すのであった。さらに、「元来、日本の外交は、前以て諸外国に打ち合わせということせず、卒然として何時も不意に出るから動もすれば、かような衝突を招くのです。とにかく、日本政府がわれわれの意を体して、その名誉を保持するの約を講じられるよう、希望しています」と、言葉は丁寧であったが、その意は傲慢無礼を極めたものであった。春の陽射しが、次官室の窓一杯にあふれている。…明治天皇は5月10日、大詔を渙発して、遼東半島還付を国民に告げたもうた。国民は等しく悲憤の涙に暮れて、臥薪嘗胆を誓うの外はなかったのである。

北清事変と義和団事件について

焚書「大衆明治史」下巻において次のように述べている。日清戦争が日本の圧倒的な勝利を以っ

て終わりを告げると、ここに支那は完全にその無力を全世界の前に暴露した。それまでは、列国は、支那の軍備が見掛け倒しであることは知っていたが、その人口の龐大と領土の広大なことに一目置いて「眠れる獅子」などという妙な形容をしていたが、日清戦争におけるその惨敗は、結局「眠れる豚」でしかないことを暴露したのであった。弱肉強食の列国の帝国主義は、これを期として猛然とその牙をむき出して、相次いで支那を脅迫して、利権獲得に乗り出したのであった。

日清の役が終わってから数年の間に、列強が支那から強奪した利権は、主なものばかりでも三十一件もあり、老大帝国支那は全身をずたずたに喰い虐まれ、のたうち回っているという惨状を示した。

これに対して、支那の政治家たちは何をしていたのか。もちろん、康有為一派を中心とする光緒帝の進歩的な国政改革の企てはあったが、西太后はクーデターによって光緒帝を幽閉し、皇帝の実権は守旧的な諸王大臣によって占められてからは、もっぱら以夷制夷の古いやり方一本で、その日その日をゴマ化している有様だ。そのため、列強の侵略に対して、中央地方を通じて、猛烈な排外仇敵の風が起こったのも当然であった。

中でも、明治 33 年、山東省で起こった義和団は、耶蘇教排斥、外人駆逐の熱を上げ、見る見るうちに支那全土に広がっていったのである。義和団というのは、一種の宗教的な秘密結社であって、彼等は皆集まって拳棒を練習して、その術に長じていたので拳匪（けんぴ）とも云われている。神術を得れば、槍も鉄砲も傷つけないと信じていて、呪文を唱えながら勇敢に戦うのである。彼等の唱える「仇教、滅洋」の口号は、外人の横暴に憤慨していた当時の支那民衆をうまく捉え、勢力が増大するとともに、諸所の教会堂を焼き、宣教師、教民を虐殺した。しかも保守派で占められていた皇帝が、これ等の暴徒を義民として擁護するや、義和拳匪は北支一帯に蔓延し、遂に天津居留地を攻撃し、北京の各国公使館区域を包囲するに至った。これが北清事変の発端である。

北京籠城を解くため、日本は直ちに第 5 師団を動員した。師団長は山口素臣中将であった。先遣部隊として、福島安正少将の下に混成旅団が広島で編成され、直ちに支那に上陸すると同時にここに日本陸軍の真価は、各国陸兵の面前で、評価されることになった。この混成旅団の衛生部員として従軍した下島空谷氏は、各国軍隊の素行について「西洋の兵隊の分捕りというものは、話にもならぬ位ひどかったもので、戦争は日本兵にやらせ、自分たちは分捕り専門にかかった、と言っても言い過ぎではなかった程でした」「通州における西洋の兵隊の暴行は言語に絶するものがあつた。彼等の警備区域で支那の婦人たちが籠城したという女劇場に行ってみると、そこは一面の女の屍体の山であつた。しかも若い婦人に対して、一人残らず行われた行為は、人間業とは思えぬものがあつた」と語っている。それにつけても、日本軍の軍機厳正、清廉だったことは、勇敢であつたことより幾倍も誇っていいと思う。

日本軍は北清事変に対して何らの野心もなかつた。軍部も政府も足並み揃えて、ただ居留民の保護と支那の平和のために全力を尽くして、他に求めるところがなかつた。この事変の解決には、日本当事者の考えは公明で大きなものがあつたのだ。あれだけの大軍を動かし、あれだけの働きをしても物質的利益の要求は、西洋諸国の一割にも満たなかつた。

開戦の決定について

焚書「大衆明治史」下巻において次のように述べている。明治37年1月6日、露国からは、最後回答とも言うべきものが届いた。その内容は日本の韓国に対する特権、すなわち日清戦争において、幾多の犠牲を払って得たわが權益を、あくまで一方的に否認し、韓国に中立地帯を設け、その縄張りを相互に決めようという、極めて虫の良い回答なのである。これは到底我が国の忍びえざるところである。1月30日午前、さしも露国に対して和協的であった伊藤博文は、桂首相をその官邸に訪問して、日露問題は遂に最後の断を下さざるべからざる時機に到着したと、その決心を語っている。その席には、小村外相と、海軍大臣の山本権兵衛がいたが、山本は、終始黙然として、深く沈思するものの如くであった。開戦となれば、軍部大臣として如何にその責任を果たすべきか、また果たして必勝の算はあるのであろうか。一座には重苦しい空気が流れていた。伊藤、桂と、今まで和協論をとっていた首脳部も、今や遂に最後の肝を固めるに至ったのであるから、日露開戦は避けられぬ形勢になってしまった。

この外国の最後手段の決定と、時を同じくして、最早一刻も猶予されないとする一大警報が、わが参謀本部に入った。それは、露国参謀本部では、既に対日作戦計画を作成して裁可を得、日本に対して戦争を始めるとする情報である。この情報を手にした参謀総長大山巖は、2月1日急遽参内し、明治天皇に重大な伏奏をなした。その大要は「今日に至って、わが政府がなお決するところがなければ近き将来において不幸に遭遇するばかりでなく、徒に彼の術中に陥り、また挽回すべからざるに至る。今日において一日の猶予は、一日の利益を敵に与える。若し弥久して為すところなければ内に於いて軍の士気を沮喪し、外に於いては優柔不断の嘲りを招き、世界の同情は失われる」と、「伏して聖鑑を仰ぎ奉る」旨を上奏したのである。2月4日午後、明治天皇は伊藤、山県、松方、井上等諸元老、大山参謀総長、桂首相、山本海相、寺内陸相、小村外相等を御前に召して、会議を開かせ賜うた。御前会議では、一人の異論を唱える者もなく、満場一致で露国に対する開戦を決議し、註露公使栗野慎一郎をして、国交断絶の旨を露国政府に通達せしめた。翌5日、勅諭を陸海軍人に賜い、露国と交渉を断ち、自由の行動を執るに決定せしことを告げたまひ、その忠誠勇武をこいねがい賜うた。これに対し軍部大臣は、即刻奉答文を奉って、その忠誠を誓った。国民は奮い、開戦準備はなつたのである。

日露開戦における伊藤博文の悲壮な決意

同書で次のように述べている。財政問題で思わぬ波瀾を巻き起こした、2月4日の最後の御前会議が終わって夕刻6時、枢密院議長伊藤博文は、雲南坂の官舎に伯爵金子堅太郎氏を呼び寄せた。「実は今日の御前会議で、日露開戦の御裁可が下つた」そう言って伊藤は沈痛の面持ちで金子伯の顔を見つめた。「それで今日君を呼んだのは、外の用ではない。これから直ぐアメリカに行ってもらいたい」あまりだしぬけなので、金子伯は、「それはどういう訳ですか」と訊ねると、伊藤は「この日露の戦争は一年続くか、また二年三年続くか知らぬが、何れは両国の中に入って調停する国がなければならぬ。頼むところは、アメリカ一国である。自由な立場で日露の間に介在して、平和克服を勧告するのは、アメリカの大統領より外はない。君が大統領のルーズベルト氏とハーバート大学の学友で懇意なのだから、大統領に会ってこの事を通じ、同時にアメリカの国民をして日本に同情を寄せ

るように一つ工作をしてもらえないか」つまり講和の予備交渉と今日で云う国際宣伝戦という、二つの大きな使命を囑されたわけである。金子伯は、此の使命の重大さを思って、到底全うし得ないからと固辞すると、伊藤は「君は成功不成功の懸念のために辞するのか」「さよう御座います」「それならば云うが、今度の戦は、廟堂でも一人として成功を確信する者はないのだ。陸軍も海軍も大蔵も、日本が確実に勝つという見込みを立てている者は一人としてない。ただし、このまま打ち捨てて置かならば、ロシアは満州と朝鮮を侵し、九州へも進んでくること火をみるより明らかだ。事ここに至れば国を賭しても戦う一途あるのみ、成功、不成功など眼中にない」伊藤は顔面紅を呈しなおも言葉をつぐのであった。「斯く云う伊藤博文の如きは栄位栄爵生命財産は皆、陛下の賜物である。今日は国運を賭して戦う時であるから、わが生命財産栄位栄爵はことごとく陛下に捧げて御奉公する時機であると思う。我輩といえどもこの戦争には成功の自信はない。しかし伊藤は、若しも満州の野にあるわが陸軍がことごとく大陸から撃退せられ、わが海軍も対馬海峡で悉く打ち沈められ、いよいよロシア軍が海陸から我国に迫った時には、伊藤は身を卒伍に落として鉄砲をかっづき、山陰道か九州海岸において、博文の生命のあらん限り戦い、敵兵に一步たりとも日本の土地は踏まされぬ決心である。成功不成功は問うところでない。一つアメリカに出かけてはくれぬか」と、満腔の熱意を以って説くのであった。伊藤のこの決心と言葉は、金子伯の直話だけに本場で、その悲壮さにおいて、胸を打つものがある。以って、わが政治家の決意のほどが偲ばれるではないか。

金子伯は伊藤のこの熱意に動されて、アメリカ行きを承諾したが、なおも国内各方面の戦局観を打診しておこうと考えて、参謀本部に児玉次長を訪れた。児玉は、金子伯の姿を認めると、「君がアメリカに行く聞いて安心したよ」とニコニコしてその居室に招ずるのであった。金子伯は「僕は一寸も安心しとらんよ。ところで山県さんに聞けば、君が陸軍の事は全部計画していると言うんだが、一体勝つ見込みはどの位あるんだい」と、単刀直入に尋ねた。児玉は「そのために、俺は着のみ着のまま、カーキ服を着て、兵隊の寝る寝台に赤毛布をかぶって、この参謀本部で三十日も作戦計画に没頭してるんだよ」「そうか。その三十日の研究の結果はどうだ」「何とも言えぬが、まあ五分五分かな。ただし五分五分では戦争のカタはつかん。そこを四分六分にしようと思って、頭を痛めているんだ。六遍勝って四遍負ければ、その中どこか調停に立つ国も出てくるだろう。それには緒戦といって、第一番目の戦闘が肝要だ。これに負けると士気が沮喪する。だから緒戦で、鴨緑江戦では露軍が一万持って来れば、こちらは二万、向こうが三万で来れば、日本は六万という倍数で戦うつもりで今から兵数を計算し、兵器弾薬を準備しているんだ。まあ君がニューヨークで演説している最中、六度は勝報が行くだろうが、四度は負け戦の電報が行くものと覚悟していてくれ」この四分六分の計算が、陸軍としては当時精一杯だったのである。連戦連勝とは、とても計算だけでは割り出せたものではないのである。

金子伯は、さらに海軍省に行って、山本海軍大臣に会った。只今、児玉將軍に会って、陸軍の方の見込みを聞いてきたが、海軍の方はどんな予定でおられるか、と訊ねた。山本は率直に「まず日本の軍艦は半分沈める、その代り残りの半分を以って、ロシアの艦隊を全滅させる。僕はこういう見当をつけている」「そうすると海軍の方が余程陸軍より強いね。児玉君はこれこれ言った」と、児玉の話をした。「そうか、僕の方は半分は軍艦を沈める。また人間も半分は死んで貰わねばならぬが、君

もアメリカで、どうかその心算でやってくれ」と言って、互いに手を固く握り合ったのであった。これが当時の真相であった。伊藤は、これから数日ならずして、伊勢神宮に戦勝祈願の参拝をしているが、列車中で一詩を賦して、これを各元老閣僚に示した。その冒頭に、「臣は是れ忠狂、世疑うこと勿れ」と詠じている。

満州軍の編成

満州軍の編成について、同書では、特に参謀次長の人選と児玉総参謀長の決定等が詳細に述べられている。明治36年10月1日、対露作戦の権威者として自他ともに許していた、参謀次長田村怡与造（いよぞう）は肺炎で長逝した。享年五十歳であった。何しろ日露の風雲はいよいよ陰悪化し戦争近し、という時に於いて、殆んど対露作戦の樹立に一身を賭したといわれる田村中将だけに、その死は国民をひどく落胆させたものであった。それだけに参謀次長の後任には誰が据わるかは、国民の等しく注目する所であった。当時の参謀次長の実際にやらねばならぬ役割と責任とを考えるならば、作戦だけにひいでた智謀の将では不足なのである。どうしても大局を大きくつかむことの出来る政治的手腕もある、大次長が要求されていたのである。

こうして、参謀次長の人選で悩んでいる桂首相に対し、児玉内相は「それじゃ吾輩が蝦蟇入（がまにゆう）のために、次長になってもいいね」と事もなげに言い放つのであった。蝦蟇入とは大山元帥の綽名で、児玉が大山を尊敬し理解していることは、桂も前から知っていたのである。桂としては「貴様、参謀次長をやってくれ」とは云えそうで云えない立場にあったのだ。何しろ児玉は桂内閣の内務大臣であって、云わば内閣の大黒柱である。しかも内務大臣は親任官だが、参謀次長は勅任官で位から云っても格が下がることになるのである。「蝦蟇入のために俺がやるよ」と、児玉はいつもの素直さで、自分から云いだしたのだから、これで問題は文句なく解決してしまった。

かくして、明治37年6月20日、満州軍総司令部の設置が決定し、大山巖が総司令官、児玉源太郎が総参謀長として、大陸に渡ることになった。大山元帥に児玉大将の名コンビは、当時としては外に得難きものと噂されたが、それは本当だったと思う。茫洋たる大山に、機略縦横の児玉、しかも共に深く相許し、尊敬していただけに、気持ちの上には一寸の隙もなかった。7月10日、安芸丸で宇品港出帆。途中、長山列島の一角に待機中の、わが連合艦隊の旗艦三笠に、東郷司令長官を訪問し、大山、東郷と二大歴史的人物は、同じ郷土の鹿児島市鍛冶屋町の思い出話に興じているのである。15日、総司令部一行は大連に無事到着した。ちなみに、満州軍は四軍から編成され、第一軍司令官が大將黒木為禎（ためもと）、第二軍司令官が大將奥保鞏（やすかた）、第三軍司令官が大將乃木希典（まれすけ）、第四軍司令官が大將野津道貫（みちつら）で、四人の軍司令官は、みな維新からの歴戦者である。

沙河会戦と旅順港閉塞作戦

沙河会戦と旅順港閉塞作戦については、同書ではほとんど触れられていないが、日露戦争における主要な作戦と思われるので、以前、筆者が会誌『郷友』に寄稿したものを紹介することとしたい。南満州での沙河会戦で日露戦争に初めて参加した弘前第八師団長の中将立見尚文は、三重県桑名藩

出身の極めて優れた野戦指揮官であり、冒頭で述べたように、満州軍総参謀長の児玉源太郎大将に沙河会戦でこの弘前師団が参加したことは、この作戦の勝利の大きな要因になったといわしめた人物である。また、この沙河会戦で特筆すべき人物に第一騎兵旅団長の秋山好古少将の活躍がある。秋山好古は松山出身であり、海軍の秋山真之の実兄で、日本陸軍の騎兵の生みの親ともいわれている。秋山好古は騎兵術について仏で学び、ロシアのコサック騎兵は人馬ともに大きく、とても一対一では日本騎兵は勝てないという判断のもと、好古が考えた戦法は織田信長が長篠の合戦において武田の騎馬隊に対してとった戦法である。すなわち、秋山の騎兵は戦闘開始とともに騎兵は一斉に馬からおりて騎兵ではなくなる。そして、騎兵隊には、仏から輸入した最新の機関銃を持たせて伏射の姿勢をとって歩兵になる。しかも、秋山は騎兵というものは宿命的に防御力がよわいため、つねに歩兵部隊を軍から借り、それを展開させた。さらに、コサック騎兵を打ち砕くには、これだけでは足りない、砲兵部隊も借りている。その砲兵がすぐさま運動を開始し、後方で砲列を布き一斉に砲弾をコサックの頭上で炸裂させることによって、その集団をかきみだすというものであった。これら3種類の兵種がまるで一つの機械のように作動しているのが秋山支隊であるといわれていた。

当時世界最強の騎兵といわれていたあのナポレオンをもうち破ったコサック騎兵は伝統的な乗馬突撃によって、何度もピストン攻撃をかけてきたが、その都度秋山好古が考案したこの防禦射撃陣形で、コサック騎兵を粉碎した。特に秋山支隊の機関銃は大きな威力を発揮し、沙河会戦の勝利に大きく貢献した。しかし、一方、乃木将軍が戦っている遼東半島の旅順においては逆にロシアの機関銃によって多大な死傷者を出し、苦戦を余儀なくされていた。

一方、目を海軍に転ずれば、開戦当初、日露戦争は大陸に増強されているロシア軍と戦うためには、まず、日本陸軍を大陸に送り込むための海路を確保することと、そしてこれら陸軍への補給支援のための海上交通路を確保することが、まずは最優先され、東郷艦隊はロシアの極東艦隊を撃滅し、制海権を獲得する必要がある。しかしながら、19万トンというロシア極東艦隊の大兵力はほとんどが旅順港に入っていて出てこない。そこで「旅順は閉塞する以外にない」という非常作戦が考え出された。この旅順港閉塞作戦を唱えたのが東郷の参謀のひとりである有馬良橘(りょうきつ)中佐と戦艦「朝日」の水雷長、広瀬武夫少佐である。この作戦は多くの犠牲を伴う作戦であり当初、東郷司令官も秋山好古の弟である秋山真之作戦参謀も反対するが有馬と広瀬の情熱によって実行されることになる。総人員は士官である指揮官、機関長をのぞくと67人が必要であった。下士官以下の人員はひろく艦隊から志願者を募った。たちまち2千人以上が応募したため、有馬や広瀬を驚かせた。なかには血書をして志願する者もいた。このとき、ロシアの駐在武官を経験した広瀬はロシアの軍人と日本の軍人を比較し、「日本人は1人1人が命がけで戦っている。これは国民戦争だ。このいくさは日本が勝つ」と秋山真之に言ったという。

かくして、旅順港閉塞作戦は1904年2月24日に決行されることになる。指揮官有馬良橘中佐の乗る「天津丸」を先頭に、広瀬の「報国丸」以下3隻の5隻で行われるがロシア軍の湾口の砲台からの砲撃によってほとんどが手前で自沈せざるを得ず、第1回目の閉塞は失敗に終わる。かくして、第2回目の閉塞作戦が3月27日に再び有馬を総指揮官として決行されるがこの作戦も結局は失敗

に終り、閉塞船「福井丸」に乗って進出した広瀬武夫は、この作戦で部下である杉野兵曹長を船が沈むぎりぎりまで探すが見つからずボートに乗り込んだ直後、敵弾が広瀬の体に命中し、戦死する。このときの広瀬中佐の指揮の状況について、広瀬が指揮する福井丸が、湾口付近に近づいたとき、探照灯に照らし出された福井丸に要塞砲が集中する。広瀬は、福井丸を沈めるための処置をして、全員がボートに移り退艦しようとしたとき、広瀬の部下である杉野兵曹長がいないことに気づく。広瀬は益々激しくなる敵弾の中で、「杉野、杉野」と叫びながらボートと船内を三度も往復したと言われている。いよいよ福井丸が沈む段になり、やむなくボートに移り移ったとき、敵の砲弾が広瀬に命中、ひとかたまりの肉片と血だらけの海図を残して、広瀬の姿は消えていた。このときの広瀬の血痕が、部下の外套にふりそそぎ、その外套が今も江田島の教育参考館に、収められている。この広瀬中佐の胆力と部下との心のつながりは、広く世に広まり、広瀬中佐は、日本で最初の軍神になる。

そして、旅順港内にとどまったロシア艦隊も、8月に入ってロシア皇帝からの「すみやかに出航し、ウラジオストックにゆけ」の命により、旅順港外に出航することになる。こうして8月10日、黄海海戦が生起する。この海戦において、東郷艦隊は戦闘においては勝つが、ロシア艦隊18隻中、戦艦5隻、巡洋艦1隻、駆逐艦3隻の9隻が傷つきながらも再び旅順港内に逃げ帰ってしまう。この旅順艦隊が活着している限り、東郷艦隊が封鎖をとけば再び、海上に現れ、日本は海上補給路を断たれ、満州に上陸した陸軍は孤立し、敵の襲来を待たずして立ち枯れてしまう。また、東郷艦隊が封鎖を続けている間に本国艦隊が極東に回航されれば、敵としては日本艦隊の2倍に近い兵力になる。そこで日本艦隊をたたき、日本海の制海権を確立すれば、満州における日本軍はたちまち孤立してしまう。このことを児玉源太郎が東郷司令部を訪れたとき、作戦参謀の秋山真之は熱く説明した。そして秋山は児玉に対し、「要塞化された軍港内にいる艦隊を外洋から攻めてゆくというのは、これは不可能にちかい。どうしても外洋に追い出さなければならない。その追い出す方法は、陸から追い出すしかない。陸軍をもって要塞を攻め、それを陥落させてしまえば、港内にいる艦隊は出てゆかざるをえない」と説明し、さらに「203高地を攻めてもらいたい。あれを攻めれば、203高地を越えて、港内のロシア艦隊を射つこともできる」こうして旅順における203高地攻撃は海軍側の要望により実現することになる。

203高地攻撃

203高地攻撃について、以前、筆者が会誌『郷友』に寄稿した寄稿文では、「坂の上の雲」を引用しつつ次のように述べている。旅順に対する総攻撃は明治37年8月19日以来、たびたび行われるがこれにあたった乃木大将が指揮する第三軍の奮闘も空しく、なかなか攻略できない。そして、満州で、先程述べた沙河会戦が行われている最中の10月15日に、バルチック艦隊がロシアのリバウ港を出港したという情報が日本側に入ってくる。東郷艦隊の修理には最低でも2か月はかかる。各艦を修理して機能を回復させねば、とてもバルチック艦隊に勝てる見込みはない。一日でも早く、東郷艦隊の封鎖をとかなければ…。海軍はあせった。東京の大本営もあせりにあせった。こうした中で、10月26日第三回目の旅順総攻撃が行われるが、おびただしい犠牲を払いながら失敗に終わる。この段階に至り、大山巖満州軍総司令官は満州にいるロシア軍の動向を見つつ、総参謀長児玉

源太郎を旅順に派遣する決心をする。その秘密命令とは「予に代り、児玉大将をさしつかわす。児玉大将の言うところは予の言うところと心得べし」というものである。

かくして、11月26日、第四回目の旅順総攻撃が行われる。なお、満州での沙河会戦に派出された弘前の第八師団と同時期に、旅順に派出された精強な北海道旭川の第七師団は、この戦闘において1万5千名のうち無傷で生き残った者が、たったの千名という甚大な被害を受ける。これは203高地に重点を移して行われるが、これもほぼ失敗しかける直前、12月1日児玉は乃木軍司令部に着く。ここで乃木と児玉は人ばらいをして、日露戦史上、統師に関して、最も重大なことが起こる。それは「軍司令官としての指揮権をしばらく停止して、自分にそれを委譲せよ」ということであった。当時軍司令官というのは天皇が親授する職にもかかわらずである。これを児玉は同じ長洲人であり、気が知れている乃木に対し、大山司令官からの命令書は見せずに「おぬしのその第三軍司令官たる指揮権をわしに一時借用させてくれぬか」と言う。これに対し、乃木の返事は一言「よかろう」と快諾した。

児玉は乃木の了解を得ることにより、直ちに乃木軍参謀を集め「大山閣下の指示により、乃木軍司令部の相談にあずかることになった」と言って攻撃計画の修正を命じる。児玉はかねてから、乃木軍司令部が後方にありすぎるため戦闘の現場を的確に把握していないことと、敵のトーチカや砲陣地を攻撃するための味方の重砲陣地が離れすぎているため、壊滅的な打撃を与えることができずに歩兵による総攻撃をかけており、いたずらに味方の犠牲を増やしていると思っていたので、すみやかに重砲の陣地転換を命じる。当時、乃木軍司令部には幕僚としてフランスで学んだ砲術の専門家が名をつらねており、参謀長である伊地知少将もその一人であった。この児玉がいったすみやかな重砲の陣地転換に対し、幕僚たちは口をそろえて、「それはできません」と言う。児玉にとっては砲術の専門家といっても、当時の日本の専門家は、外国の知識の翻訳者にすぎず追随者のかなしさで、意外な着想を思いつくところまで知識と精神のゆとりをもっていないと思っていたから、「乃木は専門家に吞まれちよったんじゃ」とつぶやくや、「命令。24時間以内に重砲の陣地転換を完了せよ」と大声でどなった。

そして、結果からいえば、児玉の命令どおり、24時間以内に重砲は203高地の正面にそのほとんどが移されたのである。また、敵のトーチカと砲陣地の正確な把握のため、大山司令官にたのんで連れてきた歩兵1個聯隊の中から15名の決死隊の斥候を敵陣地に潜入させる。ここで少し余談になりますが、この歩兵1個聯隊は弘前の第八師団に所属する秋田の第17聯隊であります。そして、実はこの15名の斥候の中に私の祖父が入っていたのでありまして、この15名のうち生き帰って敵情を報告できたのがたった2名だったそうです。祖父は運良く生き帰ることができ、戦争が終わって、この功績により金鷄勲章を授与されたと言っております。また、当時、生きながらにして異例の2階級特進の栄誉を与えられたそうです。

さて、かくして、児玉は敵情を正確に把握し、重砲の陣地変換を完了した後、12月5日早朝から砲撃を開始した。その結果、あれほど日本歩兵の上に猛威をふるっていた203高地周辺の砲台と

トーチカを、たちまち沈黙させることができた。そして、203高地に対する歩兵の総攻撃が開始されたのが12月5日午前9時。203高地には西南角と東北角の2か所に頑強な陣地があり、まず西南角が10時20分には占領、わずか1時間20分。続いて最も頑強に抵抗している東北角に対しては午後1時30分攻撃を開始、まず登はん突撃に成功したのが、松山の歩兵第22聯隊の第1中隊であり、次いで児玉が大山に頼んで連れてきた、秋田の歩兵17聯隊が銃剣突撃し、占領を確実にした。時刻は午後2時。占領までに要した時間わずか30分である。児玉は占領を確実にした午後2時、203高地山頂の将校に向かって電話をした。「そこから、旅順港は見下ろせるか」、受話器に山頂からの声がひびく。「見えます。各艦一望のうちにおさめることができます」。児玉はすぐさま、「二十八叢（サンチ）榴弾砲（これは、首都防衛のための巨大砲で当時東京湾要塞に設置していたのを旅順攻略のため運んだ）をもって、203高地越えて港内の軍艦を撃て」と命じる。こうして、港内にいたロシアの旅順艦隊は全滅する。かくして、東郷艦隊は封鎖を解くことができ、日本に戻ってとりいそぎ修理をして、きたるべくバルチック艦隊に備え、翌年5月27日に日本海海戦で勝利を収めることができたのである。

私は日露戦争に日本が勝つことができた極めて重要なポイントは、「重砲の陣地変換」という児玉の発想にあったと思っています。この「重砲の陣地変換」という当時の砲術の専門家では考えが及ばなかったことがなぜ児玉から出てきたか。それは児玉の視点のちがいによると考えます。乃木司令官はさることながら、乃木軍司令部の幕僚たちは、陸軍のこと自分たちのことで頭がいっぱいでした。児玉はバルチック艦隊が来る前に一刻でも早く東郷艦隊の封鎖を解かなければ、日本は負けるとしています。そのためには、旅順を攻略しなければならない。そのための要所は203高地だ。203高地をおとせば、港内の旅順艦隊を撃滅できる。203高地を落とすにはどうするか。それにはすみやかな重砲の陣地変換しかない。そして、乃木軍の全兵力に対して「重砲の陣地変換」を命令し、実行させたのであります。

さて、ここで児玉源太郎と日露戦争のかかわりについて今少し述べます。日露開戦の前年の10月、日本は突如、国難を支える種の一つを失いました。参謀本部次長の田村怡与造（いよぞう）中将が病没したのであります。田村は対露作戦計画準備の中心人物で、日露戦争遂行の要ともいべき存在でした。この窮地に後任の参謀本部次長として就任したのが児玉源太郎でありました。このとき、元老で陸軍の大御所山県有朋元帥や陸軍参謀総長の大山巖は、田村のかわりに難局にあたる人材は児玉しかいないと考えていましたが、その要請を言い出しかねていました。というのは、児玉がそのとき内務大臣兼台湾総督という要職にあったからであります。天皇の任命を受ける親任官から比べれば、参謀本部次長は降格です。ところが児玉はこの人事を当然のごとく引き受けます。格式にこだわらず、本質的に何が大事かを考え行動する。いかにも児玉らしい生き方の現われであります。かくして、泰然自若とした静の大山と、豪快闊達な児玉の名コンビが日露戦争における日本陸軍を率いることになります。

また、児玉が参謀本部次長に就任した当初、政府首脳は開戦に躊躇していました。参謀本部も前任の田村の慎重さから、朝鮮半島での守勢的作戦計画が主体となっていました。一方児玉は諸般の

情勢を判断して、日露の開戦はさげがたいものであり、であるならば、我に有利な状況のうちに戦わなければ勝ち目はないと考えました。ロシアは当時シベリア鉄道を開発しており、シベリア鉄道が開通すればロシアの兵員増強力は飛躍的に伸びます。当時の陸軍の兵力は日本が20万に対し、ロシアは200万の兵力を擁していました。一刻の猶予もならない。児玉は政府・財界の首脳、元老伊藤博文などを説得しました。そして開戦を積極的に指導し、開戦になるわけですが、開戦のあとの陸戦においてほとんど勝利を収めると、児玉は明治38年3月の奉天の会戦で勝利を収めるや、こんどは一転して戦争終結に懸命になります。

そして本国の政府が戦闘地域をさらに拡大すべきという方針を知るや、大山司令官の意を受けて東京に帰還すると、満州軍は攻勢の限界であることと、講和のための外交の必要性を説いてまわりました。その後、満州軍は奉天北方の鉄嶺というところで堅固な防衛態勢を敷き、海軍の日本海海戦の大勝利でようやく講和となって戦争が終結したわけです。

児玉にはこうした総合的な判断能力がありました。こうした判断力と行動力の根源は「私心」がないことであると考えます。指揮官や幕僚が判断を誤るのは、多くの場合、知らず知らずに私心が働き、自分に不利な情報は遠ざけて、有利な情報に引かれ、それによって多くの将兵の命が失われ、国の命運を危うくすることになります。そして、日露戦争を終えた翌年の1906年7月、児玉はその生命を燃焼しつくして、54才という若さで亡くなりました。

203高地の攻撃

焚書「大衆明治史」下巻において次のように述べている。

第三回総攻撃は、多大の希望を以って10月26日に開始されたが、二龍山、松樹山、東鷄冠山北堡壘を奪取しただけで、決定的な戦果は挙げられなかった。しかもバルチック艦隊は10月15日、リバウ軍港を発して、東航の途に就いたという確報は至り、第三軍はもちろん、満州軍総司令部、さらに大本営における憂色は一人濃きものがあつたのである。当時、我が攻撃の主目標は「砲台一帯の高地を奪取す」というのであつたが、前後三回に亘る総攻撃の失敗は、ようやくこの正面攻撃に対する反省が行われてきた。「旅順を陸正面から如何に強襲すとも、断じて攻略出来ん。それより、比較的防備の薄い203高地を奪い、ここから旅順港内を俯瞰して、二十八叢の巨砲を猛射すべきだ」といった意見は、第三軍の中にも擡頭したが、大本営の長岡少将、満州軍の井口少将の間に熱心に唱えられるようになった。しかし、第三軍の幕僚長、伊地知少将と大本営とは、この203高地問題で意見はまとまらず、満州軍の参謀の間でも一致したものはなかつたのである。

11月26日、遂に待ちに待った第四回総攻撃が実施された。北海道の精兵、新鋭の第七師団が新たに加わり、全軍の意気は天を衝くの概があつた。22日には、勅語が下賜され、その中には畏れ多くも、「成功を望む情、甚だ切なり」と仰せられているのである。二十八叢砲は、前日の25日から射撃を開始したが、その他の攻城重砲も翌26日から一斉に砲門を開き、地軸を揺るがす砲声は壮絶の限りを尽くした。「今度こそは…」と決死の歩兵部隊は所定の位置につき、計画通り肉弾となって前進したが、敵の反撃の砲火は猛烈を極め、松樹山砲台に向かった第一師団は三回の突撃も失敗して後

退し、望台正面に向かった第九師団も退き、第十一師団のみは東鷄冠山中腹の散兵壕を奪ったが、敵の逆襲によって奪還され、師団長土屋中將も重傷を負うに至った。さらに、旅順要塞を中断するという重大任務を帯びて躍進した第七師団の「白襪隊」も、夥しき損害と共に、指揮官中村少將も負傷して、遂に命令によって後退した。かくて、望台一帯高地占領という熱望が挫折されるとともに、全軍は水の低きに就くが如くに、戦線を北に移動して行った。

乃木将軍は27日の日記に「日夕、203攻撃を第一師団に命ず」と誌しているが、今や攻撃目標はハッキリと203高地に転換されたのであった。連日の苦闘で、司令部員は皆骨ばった顔に、ただ眼だけを光らせており、乃木将軍の眼など、すっかり赤く腫れて、丁度梅干を貼ったように、見るも痛ましい限りであった。児玉は満州軍総司令官代理として、自ら塹壕内を往復し、203高地の下に匍伏して、戦況を視察していたが、そのうちに、11月30日の攻撃で旭川師団の生き残りの兵が、約百名ばかり山頂付近に取りついて頑張っており、その兵から待望の旅順港内が見えるという報が入った。「何、旅順が見えるッ」それと云って、第七師団の白水参謀、総司令部の国司参謀、海軍の岩村参謀が観測将校として、決死の面持ちで飛び出していった。雨と降る弾丸を冒してその突角部にたどりつき、遥かに見れば、旅順の町は一望のもとにあり、港内には目の上の癌とも云うべき、旅順艦隊が7隻、その他船舶若干が歴々と手に取れるように見えるのである。転げるようにして山を下りるや山麓の重砲陣地に駆け込み、それから十分後には、二十八糎榴弾砲はじめ殆ど此処に集中したと思われる重砲が、今までにない正確さを以って、旅順の市の中枢部と敵艦に向かって雨と注がれた。この砲火に居たたまれなくなって港外に逃げ出したセバストポール号を除き、残りの6艦は撃沈或は擱座して全く殲滅されたのである。

旅順最後の日は近い。12月5日、わが旭川師団を主力として、第一師団を援助として、急ピッチの砲撃の下に、203高地は、その全部にわたって、わが軍の兵士を以って蔽われ、至る所に日の丸の旗が翻ったのであった。

奉天会戦と日本海海戦

奉天会戦について、焚書「大衆明治史」下巻において次のように述べている。

明治38年2月27日、その規模の壮大、戦果の圧倒的な点で、正に当時としては未曾有の大会戦である奉天戦は、はじまった。両軍の戦闘員は、日本軍が二十四万九千、ロシア軍が三十六万七千、まずこれだけの兵力を動かした戦闘は、当時、世界のどこでも見当たらない。しかも、ロシア軍の砲千二百十九門、日本軍の砲九百九十二門と云われるが、火力の猛烈な点でも、当時の世界戦史でも比類がなかったのである。然もこれだけの劣勢にありながら、日本軍がとった作戦は、包圍殲滅戦だったのだ。孫子の謂う「十なれば即ち困む」とあるが如く敵の十倍の兵力を以って、初めて包圍戦は成功するのである。それを遥かに劣勢の兵力を以って奉天を困んだのであるから、その計画は、放胆とも壮大とも、形容のしようがない不敵なものだったのである。

2月28日、第三軍は三縦隊をなして小北河を出発した。第九師団を奥大将の第二軍との連絡を取るために残し、第一、第七師団の兵は背囊も宿營地に残し、全くの軽装で出発した。3月3日、第一

師団で一人の敵兵を捕虜にした。訊問に移ると彼はトムスク歩兵聯隊の軍楽手であると語った。「クロパトキン將軍はどうしている」と訊ねると、「この1日に前線から奉天へ戻って、今は奉天駐車場に起居しています。神経衰弱という評判で、みんなが心配しています」と答えた。さらに、「戦線を左翼から右翼の端まで歩きまわされて、兵隊たちは疲労しきっています」と答えるのを聞いてクロパトキンが大誤算をやったことが、第三軍の幕僚たちにも分かった。喜色に溢れた第三軍の首脳部は、ここにさらに一段と強行軍に拍車をかけたのであった。6日には、第三軍の先鋒は奉天の西北方に出て、最早その背後に迫るばかりになっていた。明くれば3月7日、奉天会戦のクライマックスともいうべき日であった。第三軍は猛烈な迂回運動に、あらゆる犠牲を惜しまなかった。こうなるともはや部隊というより、雪を吹きまくる旋風であった。袋の口はもう少しで締めあがるばかりであるその先鋒部隊は早くも北陵を遠望する、奉天の真裏まで進出して行ったのである。第二軍の奥軍がその半分を潰滅されながら、なお頑張り続けている中に、第一軍、第四軍正面の敵は早くも敗走し始めた。クロパトキンは、この日の記録に、「奉天会戦は全然我が軍に不利に終れり。我が軍の努力発揮せられず、7、8、9の三日間に軍の状況は益々危急に陥り、乃木軍は我が二軍の大部分を包囲せり。3月7、8両日における両軍の戦況及び位置を対比し、主として敵の精神上我に勝れるを見、以って予は7、8両日既に我が軍の敗戦を予知し適時鉄嶺に向かい退却するに決心せり」と書いている。3月10日は、昨日の狂風に引き換えて、麗かな日だった。奉天城は、この10日のうちに、完全に日本軍の手に陥ちたのである。

日本海海戦について

焚書「大衆明治史」下巻において次のように述べている。

日露戦争勃発当初におけるロシア海軍の極東にある全兵力は、戦艦が7隻、装甲巡洋艦10隻、その他の小艦艇を加えると、その合計は19万9千トンに達している。それが開戦と同時に巡洋艦を2隻仁川港でやられ、また旅順港の夜襲で戦艦3隻を大破され、まず彼我勢力の均衡は失われ、それからは敗退一路で、旅順港は閉塞される、名提督と云われたマカロフは戦死する、黄海海戦で敗れるといったわけで、その敗色は如何ともすることが出来ない。ここにおいてロシアとして、最後の決断が必要となり、新たにバルチック海にある、取って置きの精鋭艦隊を極東に派遣して、残存の旅順艦隊と合わせて、日本海軍に一泡ふかして、戦局をここに一大転換せしめようということになったのである。

明治37年5月、露国皇帝は、ロジェストヴェンスキー中将を、新たに編成され太平洋艦隊司令官に任命した。同艦隊は、10月15日リバウ港を出港し、翌年5月9日、遅れてリバウ港を出港したネボガトフ少将の率いる太平洋第三艦隊と合流した。こうして50隻に余る大艦隊は、いよいよ朝鮮海峡にさしかかり、ウラジオストックの軍港に向かって、一路疾走始めたのである。5月26日、ロシア艦隊は一戦を覚悟で日没より、厳重に警戒しながら、津軽海峡東水道を通過し始めた。翌5月27日は露暦5月14日に相当し、あたかも露帝の戴冠式に当たるので、その栄光の下に戦わんとするものの如くであった。

5月27日、哨艦信濃丸がロシア艦隊を発見したのは、午前5時であった。「敵艦隊二〇三地点に見

ゆ。敵は東水道に向かうものの如し」との警報に接し、東郷司令長官は鎮海湾にある諸艦隊に出撃命令を出すとともに、「敵艦見ゆとの警報に接し、我が艦隊は直ちに出動、これを撃滅せんとす。本日、天気晴朗なれど波高し」という有名な第一報が、大本営に飛んだ。午前7時になると、内方警戒線の左翼哨艦和泉は執拗に敵艦隊と併進しながら、刻々の情勢を細かに打電してきた。午前10時、11時頃には片岡長官の第五戦隊、東郷正路少将の第六戦隊が薄れゆく濠気の中に姿を現して、敵の砲撃を受けながら、よく敵艦隊と接触して、時々刻々に敵情を報告してきた。そこで東郷提督は時刻と距離を計算して、午後2時頃、沖ノ島北方で我が主力艦隊が敵を迎え、その左翼列先頭艦より撃破しようとの予定を立てた。

午後1時55分、三笠に四色の彩旗が翻って、信号が示された。「皇国の興廃此の一戦に在り、各員一層奮励努力せよ」ここに、日本海海戦が火ぶたを切ったのである。日本海軍の得意とする正確な射撃と、下瀬火薬の猛烈な爆発力は、あくまで強引に食い下がる丁字戦法と相俟って、開戦30分にして、既に勝利に対する確信を掴んだのであった。

日露戦争の意義と世界に与えた衝撃

「国民の物語としての日本の歴史」においては、次のように述べている。日露戦争は、まさに、日本の自衛戦争であり、ロシアの牙から朝鮮を守ることが日本自身を守ることでありました。開戦のあとの大山巖、児玉源太郎が率いる陸戦においてほとんど勝利を収め、1905年3月10日に奉天の会戦で勝利するや、満州軍は奉天北方の鉄嶺というところで堅固な防衛態勢を敷き、東郷平八郎が指揮する海軍の日本海海戦の歴史的な大勝利でようやく講和となって戦争が終結したのです。東アジアでは日本のみがロシアの伝統的な侵略主義、南下政策をくい止めるための努力をしました。清国は、ロシアとの密約により、機を見て日本を協同攻撃する計画であったが、日英同盟によって阻止させられたのです。また、日露戦争は、ペリー来航以来50年にわたって不断にその独立と安全を脅かされてきた日本が、苦心惨たん末に、その国家存立のギリギリの危機を最終的に乗り越えた戦い、いわば50年にわたる「日本の独立戦争」の完結としての意味が最も明瞭なものと言えます。

日露戦争での日本の勝利は、アジア、中東、アフリカなど、ヨーロッパ列強の植民地になっていた各地域で、その支配からの独立をめざす意識的な気運を世界史の中に大きく浮上させるという、いわゆる被支配民族の「目覚め」をもたらした世界史の「偉大な媒体」となったのです。そして、アジア人、アメリカの黒人等が日本の勝利を望んでいました。一つの戦争の勝敗が、これほど世界的反響をよんだ戦争は、人類誕生以来、日露戦争が最初であると言っても過言ではないでしょう。日露戦争は、まさに世界の歴史が大きく動く結果となったという点で、世界史的意義があったのです。

英国の歴史学者、ポール・ケネディは著書「大国の興亡」において、「海軍の専門家は、東郷提督の艦隊がロシア艦隊を対馬沖の日本海海戦で破ったことに感嘆したが、それより脅威だったのは旅順要塞の包囲戦と奉天の会戦における日本軍将兵の戦いぶりだった。…当時の軍事専門家が考えたとおり、モラルと規律が国力の充実に欠かせぬ条件だとすれば、日本にはこの資源が豊かにあったのである」と日露戦争における日本軍の戦いぶりについて絶賛しています。

また、インドのネル元首相は、日露戦争の意義について「アジアの一国である日本の勝利は、アジアのすべての国々に、大きな影響を与えた。ヨーロッパの一大強国が敗れた。とすれば、アジアは、今でもヨーロッパを打ち破ることができるはずだ。ナショナリズムは、急速に東方諸国に伝わり『アジア人のアジア』の叫びが起こった。日本の勝利は、アジアにとって、偉大な救いであった」と述べています。さらに、東京裁判で日本の無罪を終始主張したインドのパール判事は、1905年、彼が19才のとき、アジアの小国日本が、ロシア帝国と戦って勝ったという報道が全インドに伝わったときの感動を「同じ有色人種である日本が、北方の強大なる白人帝国主義ロシアと戦ってついに勝利を得たという報道は、われわれの心をゆさぶった。私たちは、白人の目の前をわざと胸を張って歩いた。先生や同僚とともに、毎日のように旗行列や提灯行列に参加したことを覚えている。私は日本に対する憧憬と祖国に対する自信を同時に獲得し、わななくような思いに胸がいっぱいであった。私は、インドの独立について思いをいたすようになった」と回顧しています。

明治の終焉

日露戦争後の日本の地位と明治の精神について、明治の終焉と題し、菊池寛氏は焚書「大衆明治史」下巻において次のように述べている。

日露戦争の勝利は、東亜における日本の指導的地位を、全世界に対して示す第一声であった。列強は好むと好まざるとに拘らず、日本の国威と、その東亜における発言権を認めざるを得なかった。ロンドンのスペワテーター紙は、戦後の日本を論じて「この新興国は、欧州の最強と称せられるものを打倒し、その陸海軍を粉碎し、西洋第一流の名将も、相対しては逡巡すべき精鋭五十万を、アジア大陸において転戦する能力あるを証せり。今や何れの国と雖も、その存亡を賭するの決心失くして、日本と砲火を交うるの不可なることを覚らしむ。けだし、同国は真に北太平洋の雄にして、多年北京において優越なる勢力を振り、世界の中、最も未開の大市場たる清国に於て、貿易その他の事業上において吾人の最も有力なる競争者たらん」と述べているが、その隆々たる前途は、識者の等しく認める処であったのだ。明治時代を通じての二大戦争たる、日清日露両役が如何なる意味で戦われたか、それは韓国の独立を保護し、半島に伸びる第三国の魔手を、われわれは日本の生存権に対する直接の脅威と認めたがために、国運を賭して戦うこと二回に及んだのである。

日露戦争が終わり、日本の宗主権が認められると、伊藤博文は統監とし京城に赴き、大いに庶政一新を計った。農事の改良、道路の改修、各種学校の新設など、伊藤はかつて日本の近代化の優れた技師であったことを、韓国においても示したのである。半島の近代化は着々と軌道に乗り、日本の東亜における地位は一段と強化されたのである。半世紀にも満たない僅かな時代に、日本は真に目覚ましい発達を遂げた。この愕くべき進歩の動因は、不世出の英主にてましましたる明治大帝を中心に、国民が真に挙国一致の団結の下に、勇往邁進したる「明治の精神」に帰することが出来る。指導者も優れていた。彼等の眼光はつねに世界の大勢を洞見し彼等の精神はいつも美事な調和を示して、凡そ極端に流れるということとはなかった。外国文化を摂取するのに急であっても、日本の伝統精神がいつも基調をなしていた。国民も勿論、進歩するだけの良い素質をたくさん持っていた。偏することのない物の観方、あくまで進取敢為の精神は、明治全時代を通じて、どれくらい活気ある

場面を展開したかしのれない。もちろん明治史にも未熟さもあるし、悲しみ、焦燥もある。しかし、外国が二百年から三百年もかかってやったことを、僅か五十年にして追い着こうというのであるから、それは恕すべきであろう。敢闘の意気を満面にみなぎらして、世界史のコースを列強に伍して疾走するこのランナーに交替して、われわれは更に新しい勇氣と決意をこめて、走りつづけなければならない。

おわりに

以上、焚書『大衆明治史』菊池寛著の上下巻の復刻に伴い、日露戦争の意義等について、同書を紹介するとともに、筆者がこれまで会誌『郷友』等に寄稿した日露戦争の諸作戦について述べた。

菊池寛氏は、同書の最後に、明治大帝を中心に、国民が真に挙国一致の団結の下に、勇往邁進したる「明治の精神」について、「指導者も優れていた。彼等の眼光はつねに世界の大勢を洞見し彼等の精神はいつも美事な調和を示して、凡そ極端に流れるということとはなかった。外国文化を摂取するのに急であっても、日本の伝統精神がいつも基調をなしていた。国民も勿論、進歩するだけの良い素質をたくさん持っていた。偏することのない物の観方、あくまで進取敢為の精神は、明治全時代を通じて、どれくらい活気ある場面を展開したかしのれない」と述べて締めくくっている。

日露戦争での日本人の倫理観については、本寄稿文においても一部記述したが、最後に日露戦争を通じての日本人のモラルの高さについて再度記述することとする。それは、熾烈な戦闘下であっても各所で武士道精神が発揮された事である。1904（明治37）年8月14日、第2艦隊司令官である上村彦之丞提督は、蔚山沖でウラジオ艦隊（リューリック、グロモボイ、ロシア）を捕捉し、双方の激しい海戦の末、巡洋艦リューリックを撃沈、ほか2隻を大破させた。日本にとって、ウラジオ艦隊は、陸兵の乗った常陸丸などを撃沈した恨みのある艦隊であった。しかし、ロシア兵600余人が、海に投げ出されたのを見た上村司令官は、「彼らを全員救助せよ！」と命じ、救助されたロシア兵は、皆、涙を流して喜んだという。また、上村司令官は、救助したロシア兵に、部下が復讐の念をもって虐待行為をしないよう、各艦に「捕虜を厚遇せよ」と重ねて命じた。そして、参謀の佐藤鉄太郎中佐に現場を見に行かせる。佐藤中佐が捕虜の現場に行くと、負傷して横たわるロシア兵に対して日本の水兵達が、真夏の猛暑の中で、周りを取り囲み扇子を開いてあおいでおり、佐藤参謀に水兵が「こいつらは憎い奴ですが、こうなったらかわいそうです」と労わっていた。この状況報告を受け、上村は心から安心し喜んだという。また、日本海海戦で勝利を収めた東郷平八郎大將は、海戦が終わった5日後に、捕虜になった敵の司令官ロジェストウエンスキーを、佐世保の海軍病院に見舞った。東郷司令長官は、傷ついた敵の提督を見舞い、「困難な大遠征の成功は見事で、将兵にいたるまで、最後までよく戦われた。心おきなく、養生して回復されてください。」と、その勇戦を讃え、労りの言葉をかけた。ロジェストウエンスキーは、感激して返す言葉もなく、涙ながらに「私は、あなたのような名将と戦い、敗れても悔いはない。」と述べたという。これまで西洋諸国にはできなかったことを、日本が実践して示し、世界は武士道の鑑として、賞賛を惜しまなかったのである。

さらに、陸戦においては、明治37年12月5日、203高地を占領し、ロシア旅順艦隊を壊滅さ

せた翌年の1月2日、敵将ステッセルと水師營で会見が行われた。この時世界中から多くの報道関係者が集まり、この会見を取材しようとした。乃木將軍はこの取材に対し、敵将ステッセルに、恥をかかせてはならないと一斉の取材を断わった。しかしながら、せめて写真だけでもとらせてくれとせがむ報道陣に対し、それでは仕方がないと言って、ステッセル以下幕僚に帯剣をさせ、対等意識のもとに写真をとらせた。この「水師營の会見」はやがて小学校の唱歌として「昨日の敵は今日の友」という歌い出しではじまり、長く日本人に愛された。そして、ステッセルはその後ロシアに帰るが、ロシア政府は敗軍の将となったステッセルに銃殺刑を言いわたした。これを聞いた乃木將軍は敵将の勇敢を称え、ニコライ皇帝に敵将ながら勇敢に戦ったことを記した助命嘆願の手紙を出した。その結果、ステッセルは、死を免れてシベリアへの流刑に減刑された。さらに、銃殺刑を免れた敵将ステッセルの家族に対し、ロシア政府は極めて冷遇するが、乃木大將はこの家族へ、明治天皇崩御に際し、自らが自決するその時まで、生活費を送り続けたという。

世界の戦史上、このようなことは乃木大將以外に例がないのである。そして、日本の武士道精神の根幹にあるものは、敵を敬うという武士道精神であった。日本では、なぜこのように「敵を敬う武士道精神」を貫くことができたのか。それは、明治天皇の御製、「国のため あだなす仇は くだくとも いつくしむべき事な 忘れそ」の精神を忘れなかったからであると言えよう。日露戦争における乃木大將たちの武士道精神、捕虜に対する配慮を見るならば、大東亜戦争における戦勝国の行動と比べ、同じ戦勝国として、どちらがより文明国家であり、法治国家であり、そして品格ある道義国家であるといえるだろうか。日本が大東亜戦争で支払った代償は、筆者がこれまで会誌『郷友』でたびたび述べてきたように、国際法違反の東京裁判による国家への汚辱と歴史の偽造、ABC級戦犯裁判による不当な大量の刑死者、原爆投下・本土無差別空襲による非戦闘員大虐殺、民間避難民に対する暴行陵辱、捕虜に対する虐待等と枚挙にいとまがない。教育が荒廃し、自虐史観からなかなか抜けることが出来ない今日、日本再建の展望を確かにするためには、歴史の偽造を打破しつつ、日本が歩んできた近現代日本の歴史を誇りに思い、日本人としての誇りを取り戻すことが、今、何よりも日本に求められていると考える。